

北澤 毅 著  
『〈教育〉を社会学する』

学文出版 2011年 19.8×13.7×2cm 262頁 ¥2520(税込)

高橋靖幸

本書『〈教育〉を社会学する』は、その名のとおり、現在の日本の教育あるいはより広く教育一般を社会学の視点から読み解くことを試みた論文集である。編者はまえがきで、社会学を「自明性を問い直し意外性を見いだしていく」営みであると述べている。教育を考えるためには、つねに思考し世界の見方を更新していく社会学の姿勢が必要であることが説かれるのである。こうしたねらいのもとに編まれた本書の各論文のそれぞれが、ややもすれば常識や経験則に基づいた考えに満たされがちな教育のさまざまな現象について、それらの考えからは距離をとった、社会学の見地からの考察を丁寧に展開してくれている。

私たちは日ごろの生活のなかで、さまざまな教育の活動を目にしたり、耳にしたりしている。教育の仕事に携わる人たちはもちろん、それ以外の仕事においても私たちは、人との関わり合いのなかで(広い意味での)教育の活動に関与することがあるし、またテレビや新聞などのメディアを通じて教育に関わる多様な報道にふれる機会を多くもっている。

そうしたなかで私たちはまた、教育に関わる困難に直面したり、また直接的にはないとしても教育の問題を見聞きし、そのことに困惑することもしばしばある。そのようなとき、私たちはその教育の困難や問題についてどうすればよいのかという思いに突き当たる。このとき重要となるのは、それらの困難や問題を教育のどのような困難や問題として理解するか、という私たち一人ひとりの理解のあり方である。なぜなら、教育の問題についての理解が、その理解を基盤とした私たち一人ひとりのつぎの実践を生みだすわけであるし、またその実践の結果(問題の展開)がつぎの私たち

の理解を生みだす教育の現実となるからである。こうした社会的行為のリフレクシヴな様相をオート・ノイラートの有名なたとえていえば、私たちは社会という大海原で教育という船の舵を取る時、自らの乗っている船の形を造り続けるとともに、またそのことによってその船自体を前へ前へと進めている、ということである。

私たちは教育の問題に直面したとき、その問題を解決するために、いかに実践を展開するかということに目を奪われがちだ。では反対に、私たちは現在の教育に関わる問題を理解する術をどれだけ持ち合わせているだろうか。教育は私たちにとってあまりに身近なものであるため、そこには社会の常識や個人個人の経験則が入り込みやすい。また教育は社会の多くの人たちにとっての関心の対象となるため、そこで語られる言葉は多くの人たちにとってなじみある聞き慣れた常識の言葉となりがちである。

しかし、社会の常識や自らの経験則のみに頼るのではなく、教育を多角的に理解する方法を持ち合わせることもまた私たちにとっては必要とされるはずだ。常識や経験則は学ばなくとも実践のなかで自然と外から私たちのもとへやってくる。しかし、常識から距離をとり、教育を「社会学する」あり方は、自らが進んで学ぶことでしか手に入れることはできない。その意味でまさに、本書『〈教育〉を社会学する』に収められた各論文は、教育を「社会学する」方法を読者に提供してくれる格好の本である。著者たちは、社会学の理論や方法を説明するために教育現象を例にとりあげるのでなく、おのおのの論文の中で教育現象をよりよく読み解くために社会学の理論や方法を導入してくれている。そこでとりあげられるテーマも学校、教師、受験、いじめ、若者文化、社会化と多岐にわたる。本書は、教育社会学が何なのかまったく知らない人、これから教育社会学を学ぼうとする人、教育社会学をひととおり勉強してみたものの、自分がどのような研究をしてよいか考えあぐねている人など、教育に関心のあるすべての人たちにとって、大きなヒントを与えてくれる一冊である。